込み隊員を応援して以つて夜間斬り込み戦闘に参加尚５月末首里撤退の命を受け転進時は部隊の半数は死傷す

６月１２日　３４７８部隊命令にて東風平村小城、志多伯方面の敵戦車火砲を撃滅すべき任務を以つて夜間斬り込み戦闘に参加す

沖縄作戦に於ける第２４師団第２野戦病院史実資料

昭和２２年３月２５日
第３２軍残務整理部

第１　部隊編成表

部隊長（第１半部長）

将校		業務	下士官	兵
金子大尉	軍医	教育、外科		
中島中尉	軍医	発着、兵器		
島尾中尉	軍医	内科、病理		
平林中尉	軍医	外科		
工藤中尉	衛生	庶務	２４	６４
溝口中尉	軍医	内科		
松崎中尉	主計	経理		
徳久中尉	薬剤			
斉藤（順）見習士官	軍医	内科		
中村見習士官	軍医	外科		
米沢見習士官	軍医	外科		

隊長　蜂谷大尉（第２半部）

将校		業務	下士官	兵
田村中尉	軍医	外科		
遠藤中尉	軍医	庶務、外科		
太田少尉	薬剤	薬剤		
広瀬見習士官	軍医	外科		
野村見習士官	軍医	内科	１６	５６
斉藤（秀）見習士官				

	軍医	内科
杉見習士官	軍医	内科
今井准尉	衛生	

昭和２０年６月１１日及び１３日の転属

山第３４８３部隊（２４Ｄし重隊）へ	田村中尉以下１５名
	（氏名省略以下同じ）
山第３４７４部隊（２２ｉ）へ	斉藤見習士官以下６名
山第３４７５部隊（３２ｉ）へ	平林中尉以下９名
山第３４８０部隊（４２Ａ）へ	中島伍長以下２名
山第３４７６部隊（８９ｉ）へ	森　伍長以下６名
その他の転属者（不確実）	市川伍長以下３９名

第２　部隊履歴の概要

１．部隊名　第２４師団第２野戦病院

昭和１９年８月１２日頃　金沢し重連隊に於て動員完結（第９師団第３野戦病院）

９月１７日　金沢出発

９月２５日　門司出帆

１０月２５日　沖縄本島着、

同日復員し第２４Ｄ第２ＦＬとして動員完結

（９Ｄ３ＦＬが２４Ｄ２ＦＬと変わる）

２．部隊の作戦開始時の編成

野戦病院長	小池勇助少佐
第２半部長（庶務主任）	蜂谷早苗大尉

第１半部将校（人員約１００名）

隊長	小池勇助少佐	軍医
庶務主任	工藤幸一中尉	衛生
教育主任	金子良佐大尉	軍医
	島尾　二中尉	軍医

	平林　馨中尉	軍医
	中島　顕中尉	軍医
	溝口常三郎中尉	軍医
	徳久志朗中尉	薬剤
	松寄　鎮中尉	主計
	中村淳之介見習士官	軍医
	斉藤順道見習士官	軍医
	米沢新平見習士官	軍医

第２半部

隊長	蜂谷早苗大尉	軍医
教育主任	田村忠夫中尉	軍医
庶務主任	遠藤幸三中尉	軍医
	太田信昌少尉	薬剤
	野村宣岳見習士官	軍医
	斉藤秀左右見習士官	軍医
	杉　有方見習士官	軍医
	広瀬　廣見習士官	軍医
	今井新二順尉	衛生

３．指揮隷属・配属関係

昭和１９年１月２５日　沖縄上陸　同日２４Ｄ２ＦＬとなる　前記

２ＦＬは２箇半部に分かれて業務を開始せり、第１半部は直ちに独混４４旅団に臨時配属となり第２半部は２４Ｄの病院勤務に服す

昭和２０年２月１日　第１半部は原所属に復帰、第２４師団の業務に復帰

斯の如く沖縄上陸後２ＦＬは２箇半部に分かれて業務に帰し作戦開始後も続いて２箇半部に別れていたが昭和２０年６月２日戦闘最終段階に近く合一し一部隊となりて玉砕す

４．戦闘実施場所

沖縄本島島尻郡

１半部は富見城、２半部は小城に於て洞窟野戦病院を開設

４月末より５月初旬に亘り首里戦線救護班２班（２半部杉見習士官を長とする）を分遣

又患者療養所（事実上は病院と同一業務）を１０班分遣せり（溝口中尉、斉藤順見習士官、中村見習士官、斉藤秀見習士官、野村見習士官を長とする）

６月１日頃　患者療養所と共に全ＦＬを撤収し島尻南端糸満自然洞窟に後退し其処にて業務続行せるも６月１８日馬乗り攻撃を受け師団との連絡絶ゆ全員斬り込みにて終わる

之に先立ち６月１０日～１７日１半部１／３、２半部２／３の人員戦列部隊に転属せり

５．個人功績

省略

付記　２半部将校として一言したい事は２半部は常に損な立場におかれた戦線救護２を編成の時臨時部隊長は２半部より分遣せしめた、最後の戦列部隊転属も２半部と１半部と同数出され人員の少ない２半部は高い比率で出された殺された、従って生存者は１半部２３、２半部８である、当時沖縄人兵がいて人員比１５０隊１００位だったと思う

第３　部隊行動の概要

昭和１９年８月１９日　第９師団第３野戦病院の編成完結、編成担任部隊は東部５３部隊、編成場所　金沢市東別院、編成人員総計１８２名、資材車載病院医梱２組、ガス医梱２組、野戦手術燈滅菌機各２組、小銃１９が主なるものなり

編成人員左の如し

部隊長	将校	下士官	兵
軍医少佐	軍医１６	衛生下士　２８	１２９
	薬剤官　２	主計　２	
	衛生尉官　２	療衛　１	
	衛生准尉　１		
	経理官　１		
		合計　１８２	

昭和１９年９月１５日　島尾中尉以下下士官兵計９名先発部隊は同月１７日金

沢市を出発　門司港にて９月２３日乗船　其の間　門司市に於て待機　海上輸送は意の如くならず１０月２５日那覇港に上陸せり

其の間三池港、鹿児島港、奄美大島等に避難せしことあり

那覇港上陸と同時に第２４師団第２野戦病院に部隊転属となる、

昭和１９年１２月２０日第１半部は小池少佐以下１００名第４４独立混成旅団の指揮に入り其の主力は国頭郡本部半島の中央、満名付近に陣地を構築し、島尾中尉以下２０名は名護町高等女学校に於て野戦病院を開設、国頭地区の陸軍及び海軍（主として母艦迅鯨の傷者）の傷病者を収療後送せり

第２半部蜂谷大尉以下８２名は中頭郡知花に於て野戦病院を開設、師団の指揮下部隊傷病者の収療後送をなせり

第９師団の転進に伴い各部隊の警備地区変更し昭和１９年１２月２０日第１半部主力は中頭郡喜舎場国民学校に於て野戦病院を開設し金子大尉以下２０名は名護町にとどまりて患者療養所となり前任務を続行す

昭和２０年２月１５日　第１半部は独立混成第４４旅団の指揮を脱し那覇港付近豊見城に全員集結し三角兵舎の急造をなし傷病者の収療をなすと共に洞窟病院の設営に昼夜を分かたず努力、第２半部全員は島尻郡志多伯付近小城に転進、同地に於て亦専ら洞窟病院の開設をなすべく掘開作業に従事す

昭和２０年３月２３日頃　敵のため海上全く包囲せらる、この頃第１半部豊見城、第２半部小城の各洞窟病院は徹宵の努力により完備しあり、昼間は全く洞窟外に出ること能はず

友軍首里戦線を放棄するに当たり６月２日島尻郡糸州に第２野戦病院の全部集結するまでの期間に於て左記の軍医を長とする約２０名宛の救護班患者療養所を交互に派遣せり

第１半部より　溝口中尉　島尾中尉　斉藤順見習士官　中村見習士官
米沢見習士官

第２半部より　斉藤秀見習士官　広瀬見習士官　野村見習士官
杉見習士官

昭和２０年５月２５日　第２野戦病院は糸州に転進開始　同６月２日集結　糸州の自然洞窟に病院を開設す

昭和２０年６月１１日及び１３日、命により別表人員の転属あり其の任務は衛

生部のみならず戦闘要員なりき（補兵部隊等の戦闘員減少のため）

６月１９日夜より軍及び師団司令部との連絡全く途絶　６月２３日夜師団司令部よりの患者護送員より左記要旨の命令を聞く

「部隊は最早統率ある行動をなし難し、各自出血を強要すべし」

我が部隊長は直ちに左記要旨の命令を下達す

「６月２３日より同２７日の間に於て３～４名宛１班となりて出撃し出血を強要すべし、尚幸いにして敵包囲線を突破し得る時は国頭に到り友軍に合っし出血作戦に参加すべし」

６月２８日糸州の洞窟に於て小池部隊長は自決せりと伝えらる

個人功績

（１）野戦病院なるを以つて戦闘即患者の収療故に一般戦闘部隊の如く其の功績により進級せしものなし

（２）然れども昭和２０年６月６日　部隊長は糸州の洞窟に於て全員集合せしめ「今日の如き情勢に於て最早功績書類の整備等は到底不可能なるを以つて特に功績のあったものを披露する」とて左記のことを挙げられしことあり

其の１　中島中尉以下は第１半部の重要なる資材を輸送するにあたり弾雨の中然も激しき風雨を冒し連絡をとり其の目的を遂行せり（豊見城～糸州間の輸送）

其の２　糸州の自然洞窟野戦病院の開設に当たり島尾中尉以下の設営班は連夜被弾の下、資材を迅速に収集し洞窟内の泥寧中に棚式寝台を構築し傷者を早急に収療し得たり

其の３　南山曹長以下炊事係は食料の窮乏せる本洞窟生活に際し暗中飛弾にも屈せず食糧を獲得し部隊給与を円滑ならしめたり、其の間茶野下士等兵の犠牲を出したるは痛恨に堪えざる所なり

沖縄作戦に於ける第２４師団防疫給水部史実資料

昭和２２年３月２５日
第３２軍残務整理部

山第１２０７部隊（第２４師団防疫給水部）戦闘経過の概要

１．昭和２０年３月　沖縄本島周辺の状況逼迫するや山第３４６７部隊より沖縄現地召集兵約２００名の転属を受け２ケ中隊よりなる患者収容隊を編成す

編成

第１中隊長	新堀大尉
第１少隊長	土佐准尉
第２少隊長	武内少尉
第２中隊長	黒沢少尉
第１少隊長	藤井准尉

２．昭和２０年４月中旬山第２４７４部隊（２２ｉ）石部隊に配属せられ第１線陣地に至るや部隊へ毎日患者収容隊を出し各大隊本部より首里赤田町まで一旦患者を搬送し応急処置給与などをなし更に首里より東風平村の陣地壕内或は各野戦病院に患者を自動貨車により運搬後退せしむ

担架兵の犠牲にも拘らず寡兵よく３０００の患者の後退に努む

師団長より賞詞を授与せらる

３．６月初中旬に至り全軍島尻地区への後退に伴い部隊は東風平村部落より南方約２里の真壁村に転じ尚ほ患者収容の任務を遂行しありたる居り月１８日午前１０次頃敵軍部隊棲息壕接近により部隊長以下殆ど全員米須海岸或は宇江城（当時の山部隊司令部所在地）方面に出動各個に戦闘をなし以後部隊は解散状態に立ち至れり

４．昭和２０年６月１０日頃約１００名（防護兵を含む）の下士官以下を山第３４７４部隊に転属せしめて第１線の戦闘に参加せしむ